

芥川だより

発行日***2019年1月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



***** 一部200円です *****



周りのモノがいとおしく感じた時

多発性筋炎で阪大病院に入院していた6年前、11階の病棟から万博公園を見ていると、何とも言えない愛おしさが込み上げてきた。これまで何気なく見ていた公園の樹々や道路を走る車、病院の中庭を歩く人…すべてのものが愛おしいと思う不思議な感情が私を支配していることに気づいた。これまでの私には想像できなかった感情であった。その時、とっさに昨日までの私と違う自分がいると思い、ただ事ではない一体どうなったのかと疑問に思いあれこれと考えた。

不治の病である難病で入院するのだから、もう生きては娑婆に帰れないだろうと勝手に思い込み投げやりな気持ちで入院した。最初の1週間は検査に明け暮れた後、2ヶ月間強烈なステロイドを60ミリ服用し続けた結果、副作用は身体中に出たが期待した血液検査の結果は思わしくなかった。ステロイドを諦め免疫抑制剤の投与もやむなしという話が医局内で出ていると担当医から聞き、いよいよ最終局面が始まったのだ、と自分に言い聞かせた時だった。何とも情けないことだが、私の心は弱い。いくら強がりを書いてみたところで土壇場になれば往生際が悪いのである。覚悟を決めて入院したのだから、医師から何を言われても聞き流す度量が欲しかったが、独りになると無性に生きていることに恋しくなった。そんな想いが転じてか見るもの全てが、初めて見るもののように白々と見えてきたのである。何とも言えない神々しさを持って私を包み込んでいるように思えた。

2週間後、運が残っていたのか土壇場でステロイドが効き免疫抑制剤の投与を免れた。血液検査の数値も順次下がりだし最悪の事態は避けられそうになった。すると、心の中にあったあの愛おしい気持ちが段々と小さくなってしまった。自分の心がどんどん変わっていくのがわかった。たまに思い出してみるが、あの時の神々しい想いを心底感じることはない。多くの煩惱が我が心を支配し曇らせているから見えないのである。

死をめぐるあれやこれ(52)

石川 吾郎

嘘つきは戦争の始まり

年が明けて、複数の新聞に二面広告が出た。「嘘つきは戦争の始まり」と大書された衝撃的なものだ(宝島社)。

これには短いテキストが付いていて、イラク戦争・ベトナム戦争・ナチスのポーランド侵攻の例が取りあげられている。◆しかし考えると日中戦争の発端となった満州事変も嘘から始まった。中国に侵攻していた日本軍(関東軍)は鉄道を自ら爆破して、中国軍の仕業だとでっち上げて戦争し、占領して満州国建設。それが国際連盟の調査でバレて批判を受けたが、満州から撤退せず国際連盟を脱退。その後日中戦争から太平洋戦争へ。公共放送NHKは「大本営発表」として連戦連勝の大嘘を流し続けて、国民を戦争に駆りたてる。その結果、玉碎・大空襲・二発の原爆投下・敗戦へと狂気が続く。◆現代の日本一番の「嘘つき」が、安倍首相であることは、多くの人が感じているところ。モリカケから「沖縄に寄り添う」まで。GDPや労働者の労働時間と月収まで自分の都合のいいように統計操作をする政府。そして安倍氏のための宣伝を巧妙に続けるNHKニュース。国際機関・国際捕鯨委員会からの脱退も。◆年表を見ると満州事変が一九三一年。「嘘つきは戦争の始まり」からすると、今の日本は一九三〇年代に似ている。このままでは、悲惨な歴史の再現になってしまうのではないか。◆幸い、今年七月には参院選挙がある。ここで安倍政権にNOを突きつけよう。これがラストチャンスかも知れない。ここで安倍政権の跋扈を許せば、改憲・言論弾圧・戦争への悪夢の歴史を再び繰り返すことになってしまう。

◆今年、良くも悪しくも歴史の節目の年になる。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 58	坂本一光	2
哲字爺いの時事放談 8	祖蔵哲	3
大峯奥駆道 20	下村嘉明	6
大人の今昔物語 52	石川吾郎	6
B級サラリーマン渡世譚 66	明石幸次郎	7
オクラの山たより 28	因了生	9
我がおくのほそ道の旅 22	成瀬和之	12
隠された歴史 3	満田正賢	13
見えない人 3	古城悠	16
編集後記	嘉	19
ふみの道草 7	山椒魚	20
俳句	土田裕 影山武司	20



素老人☆よもだ帳 (58)

坂本 一光

◆茜雲明日も平和か問うてみる 弘明

二〇一八年八月十五日の朝日新聞「声」欄に『皆殺し』知る小さな駅の被弾木』と題した次のような投書が載った。投稿者は、大分県で農業を営む衛藤憲清氏(八十一歳)である。投書に言う(読みやすくするため一部表記に編集を加えた)。

七十三年前、私は国民学校三年生だった。戦争は激しくなるばかり。終戦の二十日前、父が戦死した。学校の運動場にはサツマイモが植えられ、警戒警報のサイレンが鳴り響く。生徒は学校に通うこともできず、

地域にある神社や集会所で分散授業が行われていた。夜は明かりが漏れないよう家庭の電灯を風呂敷で覆う。七月末にはついに、隣の豊肥線朝地駅が米軍機により銃撃を受けた。

駅には次のような立て札が立つ。

戦争を伝える三本のカイズカイブキ

昭和二十年(一九四五年)七月三十一日正午頃、朝地駅に停車中の列車にアメリカの戦闘機が銃撃し、死者十二名、負傷者約四十名という惨劇がありました。今、それを知っているのは、構内にある三本のカイズ

カイズカイブキの弾痕だけです。

茜雲明日も平和か問うてみる 弘明

朝地あそぼ会

豊後大野市

平成二十九年六月一日

朝地あそぼ会 建立

朝地駅は小さな田舎駅で、ホームに立つと右も左もトンネルの口が見える。こんな小さな駅まで銃撃の的に。「皆殺しにせよ」との戦争の恐ろしさが現われている。

三本は今では大きな古木になった。弾痕も見えず、何事もなかったように立っているが。

語り継がねばならない、戦争の恐ろしさを。

本稿表題とした、立て札の終わりにある川柳は、第五十七回大分県短文学大会(西日本新聞社主催、二〇一六年八月六日)における大会賞受賞作品である。作者の首藤弘明氏は中学校長を務めた地元(西)の教育者。戦争の記憶を風化させてはならないと、立て札の設置を呼びかけ尽力した方である。

この「声」には、千葉県在住の斎藤佐和氏(七十五歳)から素早い反応が寄せられ、間を置かず朝日新聞「声」欄に掲載された。

列車助手の死「十七」と人ら呟く

一九四五(昭和二十)年七月三十一

日に大分県の豊肥線朝地駅で起きた米軍銃撃に関する投稿『皆殺し』知る小さな駅の被弾木(十五日)を読み、父が遭遇した列車空襲のことだと気づきました。父が詠んだ歌があることを思い出し、駅のカイズカイブキの弾痕だけでなく、言葉の記録も残っていることをお伝えしたく思いました。

飛び降りし列車撃たるる音烈し
烈しき遊び敵遊びおり

我が命斯かる処に終わるか

見廻す四圍の山緑濃し

機関助手も死せり十七歳という

「十七」「十七」と人ら呟く

父は終戦の年に三十七歳で召集され、この空襲に遭ったようです。九月に郷里の熊本に帰還しましたが、肩の傷の包帯を替えていた場面を二歳だった私がかすかに覚えていたことを思うと、負傷者の数に入っていたのかもしれない。

機影が消えて我に返ったとき、機関助手の死を知って、その年を呟く人々。十首ほどの中で、この十七歳の歌は特に胸を打つものでした。この少年もその後の平和の底に眠る一人であることを忘れず、追悼したいと思います。

なお、『九州の戦争遺跡』(江浜明徳著、海鳥社、新装改訂版、二〇一八年)に収録の『朝地駅銃撃跡』には、『列車を運転していた旧制中学の生徒も死亡している

（戦時中は旧制中学（現高校生）の生徒が運転するのも珍しくなかった）』との記載がある。

山間の小さな町にも戦争の惨禍はあったのであり、戦後七十年以上を過ぎても人々の中に、それを過去のことでして水に流し忘れ去ることをしない、強い意志があることを改めて知った。今年八十七歳になる首藤弘明氏の賀状には次のように書かれていた。

山の端に平和の光初日の出 弘明

おめでとございませう

平和な朝をお迎えのことと思います

七十四年前の七月三十一日 この山間の朝地駅（現在無人駅）に停車中の列車にアメリカの戦闘機が機銃掃射を浴びせた 死者十二名・負傷者四十数名 一瞬にして阿鼻叫喚の修羅場と化した 此れを知っているのは構内にある三本のカイズカイブキの老木だけである 私たちにはこの平和を伝えて行く義務がある

戦争は絶対にしてはいけない。戦争に正義のないことをカイズカイブキとともに語り継いでいかなければならない。その強い気持ちが届められた賀状であった。（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

哲学爺いの時事放談（8）

祖蔵 哲

『人間とは何か』哲学元年

この哲学爺の放談は、前シリーズ「哲学屋のつぶやき」四六回を引き継ぎ、昨年六月から始まった。そのテーマは「アフト反則事件」「自然災害」「死刑」「戦争」「政治の嘘」「表現の自由」「自己責任」であった。そこからの哲学的な問いは「自由意志はあるのか」「恐怖の感情とは」「悪の抑止は可能か」「真実とは何か」「自由と責任」などである。さて、昨年二〇一八年の芥川だよりの一月号には「二〇四五年問題まであと二七年」と書いているが、「四五年問題」とは、読者ならご存知「シンギュラリティ」、すなわち人工知能社会の実現である。ということは今年二〇一九年は「あと二六年」ということになる。さらに本年二〇一九年は二〇一〇年代の二〇一〇年終末、同時に日本では議論の多い元号末の年でもある。何かが終わる、何かが始まる。その「何か」がわからないから皆「不安」になるのだ。さて、今年初の放談はいつもと少し趣向を変えて、今年の主な政治、経済スケジュールを取り上げて、その哲学的意味を合わせて語ってみよう。

（1）一月ダボス会議―第四次産業革命の衝撃『人工頭脳VS人間の欲望』

まずは一月、世界経済フォーラム、スイスで開催される「ダボス会議」である。そのテーマは「AI時代の国際協調」

だ。人工知能（AI）や、あらゆるモノがネットにつながる「IoT」、電子商取引（EC）「仮想通貨」などのテクノロジーがもたらす「第四次産業革命」を統一テーマに議論する。AI、IoT、ECテクノロジー、もうこの時点ですでについていけない人が多いであろう。文科系の爺ではなおさらである。しかし、現実の生活にはもうすでに多くの分野で浸透している。停電がおこりインターネットが停止すれば社会は大混乱に陥り、都会では生活機能不全に陥るのは経験済みである。では改めて「第四次産業革命」とは、以下は内閣府の説明である。『一八世紀末以降の水力や蒸気機関による工場の機械化である第一次産業革命、二〇世紀初頭の分業に基づく電力を用いた大量生産である第二次産業革命、一九七〇年代初頭からの電子工学や情報技術を用いた一層のオートメーション化である第三次産業革命に続く、「IoT及びビッグデータ」「AI、ロボット」のようなくつかのコアとなる技術革新を指す』これによって需要面には新し価値の創出、生産面では業務効率化、働き方は知能労働のAI化、そして高齢者の生活支援促進を指すと宣言している。国家規模ですべてに大きな社会変革に突入しているのである。

さて、産業という部類でみると「第四次産業」とはなにか。第一次産業は農業・林業・水産業、第二次産業が鉱工業・製造業・建設業や電気ガス業。第三次産業は一次二次産業に含まれないもので、目

に見えないサービスを提供する無形財の産業で、サービス・通信・小売り・金融や保険などが含まれる。では第四次産業というと、これら三つの産業分類の定義に入らない新しいタイプのもので、情報通信・医療・教育サービスなどの「知識集約産業」などのことを指し、技術開発など、物質やエネルギーの大量変化（消費）を伴わないという特徴があるという。「ある」か「ないか」すなわち「1か0」かという単純な「情報」が「人工知能」になり、それが「ネット」という電磁波の空間に漂う。「人工の情報」が「意志」を持つようになるのである。まるでSF映画の世界のようであるが、すでにそれは現実になっている。「フィンテック（FinTech）」である。もう新しい言葉に追いつけず脱落している読者が多いので詳しい説明は省くが、金融ファイナンスと技術テクノロジーとの合成造語である。クレジットカード決済や電子マネーもこの分野であるが、株式市場や商品取引市場など金融経済世界全体がもうすでにこの技術で成り立っている。金融資本主義である。資本主義とは本来、実体経済を基本として成立するものであった。土地、資源、労働力である。その世界での自然は人間の再生産の対象であった。しかし現在は「情報」と「欲望」という架空の実体が再生産の対象となり、それは「無限」である。無限の先に何があるのか、無限への暴走を制御、「抑制」、「抑止」するものはなにか。人工頭脳が判断できるのか、それとも人間の「理性」こ

それが可能か。哲学的問題である。

(2) 三月英国 EU 離脱―『理想主義は無力か』

二〇一七年三月に英国は EU 離脱を通知した。そして二年間の交渉の末、いよいよその期限である。現在は離脱移行期間で本離脱は二〇二〇年一二月末であるが、この三月交渉最終期限までに一定の離脱条件を協定しなければ、この日以後発言権さえなくなる。この二年間は素人目には実のあるものでなかったような気がする。これは単なる経済協定の変更ではなく、大きくはヨーロッパ世界の政治経済文化の変化につながる。

欧州では一七世紀までは、国家というものが存在せずに権威はローマ・カトリック教会とそれぞれのエリアでの皇帝とのに分散され、キリスト教と世俗のパランスの上に存続していた。しかしそのパランスは非常に脆く、地域的の戦争は絶え間なく繰り返されていた。

そして、その最大の危機が一六一八年から始まったプロテスタントとカソリックの宗教戦争である。欧州全土にわたって長期間戦争が行われた結果、だんだんと敵も味方もその戦争目的すらわからなくなってきた。そこで一六四八年関係六六ヶ国はウェストフアリア会議で停戦のための講和条約を結んだ。これが世界最初の近代的な国際条約とされている。この体制は、しばしば「主権国家体制」とも称され、国家における領土権、領土内の法的主権および主権国家による相互内政不可侵の原理が確立され、近代外交お

よび現代国際法の根本原則が確立されたことである。

しかし、この体制が欧州の戦争をなくしたのではない。それまでの宗教的権威実体から資本主義的物質実体を自覚した国民国家はより争いを増やし、拡大していった。そして一八世紀のフランス革命の自由精神の理想は易々と国境を越えて拡大していった。ある意味では究極の理念的統合である。しかし、ナポレオンによる権威による統合へのすり替え、そしてウイーン体制という旧体制への後退を経て欧州は再び混乱に陥る。そして欧州各国の植民地の取り合いとしての第一次大戦を経て、ロシア革命の成功を経験する。それは資本主義にとつての最大の脅威であり、理念による革命、過去の悪夢フランス革命の再来である。いち早く反応したのはヒトラーであり、次にはチャーチルである。それぞれに手段は異なるが目標は同じである。すなわちその理念がどちらも「対抗理念」であることである。自らが「自律的」に作ったものでなく、外側から強制されて作られたものである。

さて、EUはこの発想が原点であるといわれている。現在、ロシア革命すなわち共産主義の脅威は少なくなつて来ている。だから対抗理念がEUの理念ではない。英国が離脱を意志したのは何か。ここからが面白い独特の哲学的分析である。そんなに難しい哲学知識でなくとも読み解ける、普通の哲学通ならよくご存知のことであるが、一般にフランスはデカル

トの「合理論」ドイツはカントの「観念論」、イギリスはロックの「経験論」である。ここで「観念論」とは難しく言い過ぎで普通には「理念論」でよい。すなわち、EUの主体国であるフランス、ドイツは合理的な理想理念で統合を図ろうというのである。しかし、これに対しイギリスは「経験」すなわち体験、現状、現在を重視するのである。「理想をいくら唱えても現実はそのようになっていないでしょ」という。移民が入ってくる、失業は増える、テロは起こる、これらを無くすことが先決を言っている。実をいうとこれはアメリカと同じ理屈である。現代哲学の世界でも同じようなことが起きている。

分析哲学という潮流である。これは、現代の記号論理学や論理的言語分析、加えて、自然科学の方法及び成果の尊重を通じて形成された。アメリカ、イギリス、カナダ、オーストリアなど英語圏で主流となつている哲学である。しかし分析哲学は多様で共通点のない様々な観点が可能であり、蓋然的な共通点しかない可能性もある。ひどくおぼろげに言えば、分析哲学は、明晰さの追求と徹底的な論述を特徴とする。それはある意味、ドイツ、フランスの理想主義に対する「対抗理念」で結束しようとしているかのようである。さて、只今入ってきた国際ニュースによるとわが安倍首相は英国のEU離脱を歓迎するとか。TTPに入つてほしいとのこと、アメリカさんはどうなるのか。

(3) 五月日本天皇退位―『視点の変更…世界の構造的変化』

いわゆる「生前退位」に伴う「新天皇即位」である。元号も変わる。世界中で紀年法に西暦以外を採用している国は数少ないらしいがこれも日本固有の行事である。「天皇制」にまつわる議論には制度そのものの意義や存続の方法、世襲問題「男系女系」など近代、現代的価値観に対する「純血、正統」の問題がある。

さて、「平成」とはどんな時代であったかということが話題になっている。メディアで語られるのはあくまでも日本の紀年法による元号の発想であるから、「昭和」の次の「時代」という発想になる。その多くは昭和時代の問題の先送りとして「バブル景気」が懐かしいという描かれ方である。しかし、今一度、視点を世界規模に退いてみるとそこには違った意味が見えてくる。三〇年前すなわち平成元年一九八九年一月は昭和天皇崩御であるが同月にはアメリカのジョージ・ブッシュ大統領とソ連のゴルバチョフ最高会議議長がマルタ島で会談し、冷戦の終結を宣言、六月には中国「天安門事件」、一月には東西ドイツ「ベルリンの壁崩壊」がおきている。これらは今年で三〇周年を迎えることになる。バブル景気の崩壊もお金持ちには大いなる関心事かもしれないが、もう少し引いた視点、世界規模で社会を見ることが必要であろう。ちなみに日経平均株価、史上最高値三万八千円台をつけたのは同年一二月であるが。さて、いつまでも「元号発想」が良いも

のかどうか議論の余地がある。

(4) 六月大阪G20サミット―国境を超える「欲望」は「抑制」できるか。『神と悪』

「G20サミット」金融・世界経済に関する首脳会合の開催である。この会議は二〇〇七年のアメリカ発リーマン・ショックとそれに連鎖した一連の国際的サブプライム住宅ローン危機を発端として「世界金融危機」を回避することが目的で招集されたのが始まりである。「グローバル化」が深化し、様々な問題が複雑に絡み合う中、近年G20ではマクロ経済や貿易のみならず、世界経済に大きな影響を与える開発、気候変動・エネルギー、保健、テロ対策、移民・難民問題等の「地球規模課題」についても議論が行われてきた。この世界のグローバル化、すなわち国境を超えるものこそが、ダボス会議のテーマでお話した「欲望」である。金融資本主義がこの「欲望」をもとに仮想の情報空間にその「資本」を蓄積し、欲望が欲望を作り出している。これが「世界金融危機」の構造である。世界は一〇年前にその反省をしたはずであるが再びその危機は迫ってきている。「地球規模の課題」はすべてこの制御できなくなった「欲望」から起きていることがらである。もはや、この「欲望」は本来の「人間」の集合を超えてしまっている。あらたな「神」の出現ともいえる。否、二〇〇年も前、すでに「国富論」を著したアダムスミスも市場原理は「見えざる神の手」

によって制御されると説いている。しかし、これが「神」であればなぜそれが人間に危害を加えるのであろうか。神とは最高善のほずである。「悪」があるとすれば、なぜ万物の創造主である「神」は悪を作ったのか。しかし、そもそもこの「悪」というものは「人間」のものなのか、「神」のものなのか。私たちは、本来、人間も動物も生命あるもの、そして自然もすべて一つの世界として見てきたはずである。それに対して、人間はその思考の世界を対比して作った。それが「神の世界」でもある。本来の自然世界をも凌駕する「思考世界」は最初「哲学」と呼ばれそれが「宗教」となり「自然科学」という名前

に変わった。それに対して、それぞれ「生活世界」が形成されていった。現在の「自然科学的世界」に対する生活世界のシステムは「金融経済社会」である。貨幣システムは西洋世紀以来その生活を支配しているが「自然科学」という哲学的イデアは新しい「神」を保証しているのがある。「悪」はその神が存在しているということとを人間にわからせるために存在するのかもしれない。しかし、その時の人間は今現在の人間と「同じ人間」であろうか。

(5) 七月七日参議院選挙一〇月一〇月消費税引き上げ―『一般意志』はどこに行くのか

日本の政治である。二存じのように、日本国憲法では、参議院の任期は六年で、三年ごとに選挙で半数を入れ替える。衆議院のように任期途中での途中解散はな

い。選挙方法で衆議院と大きく違うのは、

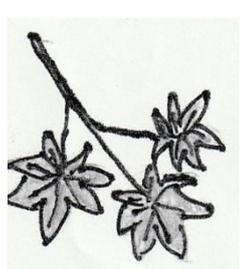
どちらも約三分の一が比例代表制で選出されるが、残りの多数が衆議院が小選挙区制で参議院が選挙区制選挙で選ばれることである。日本では衆議院が上位である。その衆議院が小選挙区制を導入したのが一九九四年である。それ以前の九三年には日本新党など八党派連立による細川内閣が誕生しているが、一方に選挙が形骸化し「人柄で選ぶ」「決断ができない」など「強い政治」を求める風潮があった。導入後にも自民党・社会党・新党さきがけによる連立政権は引き続き実現した。しかし、「強い政治」といっても、その暴走を食い止める対抗力が必要なる。そこでイギリス、アメリカなどの二大政党をモデルとした政治体制を作ろうと目指したわけだ。その後、日本の政治は相変わらず政治が混乱したが二〇〇八年、先ほども話した世界金融危機が二〇〇七年発生したのを契機に経済も混乱に陥り翌年日本憲政史上はじめての単独の政権交代が実現した。「民主党」での政権である。しかし不運が続いた、相変わらず世界経済の混乱は続き経済が安定せず、そして地震や原子力発電所の事故。国民は嫌気がさし二〇一三年、約三年間の短期で再び自民党政権に揺れ戻しが起こった。それから現在まで5年経過し安倍政権は継続している。よほどの反動である。しかし、これが小選挙区制の導入の意義であるか。この制度は大政党に有利で、政権が安定すると言われおり。短所としては、死票が多くなり、少数意見が反映さ

れにくくなる。「格差」や「貧困」はまず

まず「強い政治」の犠牲になる。ルソーの言う国民の意志を反映する「一般意志」はどこへ行ったのか。「民主主義と何か」われわれの「自覚」と「自律」が問われる。

改めて本号の哲学テーマを上げると、『人工頭脳 vs 人間の欲望』『理想主義は無力か』『視点の変更・世界の構造的変化』『神、その善と悪』『一般意志はどこに行くのか』である。これから読み取られるのは本来の「人間とは何か」である。カントは「人間とは何であるか」で三つの問を立てた。「私は何を知らるか(真理)(視点)」「私は何をなすべきか(善)(意志)」「私は何を希望してよいか(理想)(欲望)」である。すべては「哲学的問い」である。人工頭脳が哲学をするのか。「人間とは何か」が問われる年の始まりでもある。

最後に唐突であるが爺いはこの月末にインドに行く。なぜインドと言われても困るが、西欧哲学の一つがキリスト教であるとすれば、東洋哲学の一つがインド哲学であり仏教でもあろう。来月号はインド哲学紀行になるかもしれない。



朝六時に前鬼林道の車止めゲートから歩き続けて五時間余りで深仙小屋に着いた。小さな小屋は三角トタン屋根で造られ二人ほどが寝泊まりできらすが、疲れた私は、小屋には関心がなく釈迦ヶ岳に続く道に立ちふさがる大きな崖壁に見入った。あそこを登るのだろうか？道はどこにあるのだろうか、と思索していると、一人の青年が目の前に下りてきた。「水場は、岩場の東側を巻いたところにあります。前鬼から釈迦ヶ岳を往復して帰るところです」と元気に言った。

私が「前鬼からの登り道が分かりにくい、ガスがかかった下りなら迷いかねないね」というと彼も「そういえば、道に迷って遭難事故が起きています」と返してきた。

青年と別れて歩き出す。大きな岩場を巻くように西側にあるロープが下げられた踏み跡をよじ登った。やつの思いで崖を登り終えて尾根筋に出て、釈迦ヶ岳を目指して歩く。疲れ果てた私は、もう登れないと弱気になっていたが、同行の二人は頑張っ

て歩いている。疲れて息も絶え絶えになれば、風景を楽しむ余裕はなく、ただ下を見てあえぎながら一歩一歩足を上げるだけである。ともにもかくにも歩き続けて標高一八〇〇メートルの釈迦ヶ岳の山頂に着いた。数人の登山者が山頂の釈迦如来像を背にして写真を

撮っていた。初めてみる如来像は大きく三六〇度見渡せる山頂の岩場に備え付けてあった。

どうしてこんな像があるのか？誰が作ったのか？不思議であった。後で調べると、この像は大正時代に「鬼マサ」の異名で知られていた岡田雅行という強力が、たった一人で道をつくりながら、三分割して担ぎ上げたと伝えられている。

何とも凄い人がいたものである。三〇〇キロは優に超えるであろう金属の塊である如来像を背負って険しい道を担ぎ上げるのは、私の想像を超えていた。

当時は、前鬼林道もなく前鬼口から山道を歩き釈迦ヶ岳まで一〇〇キロを超えるような金属を担ぐことは命がけだったと思える。いくら優れた山案内人でも、到底不可能だと最初は思ったに違いない。

しかし、人々の熱い山岳信仰に押され、やむなく決行したのだろう。道も整備されていない急な岩場や沢筋を歩けるように石を組み木で階段を作り重い荷を担いで歩けるようにしたのだ。しかし、大日岳の急な

崖壁はどのようにして登ったのだろうか？空身でも苦しい急なところを一〇〇キロを超える荷を担いで登るとは・・・私も学生時代の夏に、立山にある雷鳥沢の登りで九〇キロほどの荷を一度だけ一時間ほど担いで登ったことがある。その時、少しでもバランスを崩せば転げ落ちてしまう恐怖と止まったら、次に歩き出せないのではという不安、もちろん荷を降ろして休めば、荷

を担ぎ上げるのが大変だから、ピッケルで荷を支えて立ったままで休み、歩幅は普段よりも短く浮石には絶対足を置かないようにした思い出がある。

雷鳥沢のように登山道が整備されていたから歩けたが、この釈迦ヶ岳に至る道は、とてもじゃないけど歩けない。もし、私が若くて元気な時でも四〇キロ位が精いっぱいだろう。

鬼マサにとつても、まさに命がけの大仕事であったと思う。断り切れずに引き受けたからには、何が何でもやらねばならない、山案内人のプライドにかけて命を懸けたのだ。

この釈迦ヶ岳の頂に立つと視界が素晴らしく釈迦如来像を鎮座させ人々の信仰を深める象徴にしたい強い願いが湧いてきても不思議ではない。この像から感じるのには、運び上げた鬼マサだけでなく、この地域の人々が如何に山岳信仰に熱心かということである。大峯奥駈道を守り修験道を絶やさない願いが代々受け継がれているという事実である。

日本の山岳信仰は各地にあるが、この大峯は日本屈指の修験者の聖地と言われる。確かに立山や白山など山岳信仰の熱心なところがあるのだが、この大峯は、それらの地域とどこか違う匂いを感じる。一言でいえば、他の地域より山が深いということではないだろうか。紀伊山地の真ん中に南北に連なる大峯山脈は山の神の本来本元に見える。

今回は、肝試し風の怪奇譚です。これに似た話は、昔話の一つの類型になっています。教科書にでない度は三／五。頼光の郎党平季武、産女に会うこと(巻第二七・第四三)

今は昔、源頼光の朝臣が美濃の守であったとき、某の郡に滞在したときのこと、夜になり侍所に数多くの部下の侍たちが集まって、さまざまな物語をしているうちに、「この国に某の渡りというところに産女というものがいたそうだ。夜になってその渡りで川を渡る者がいれば、産女は赤子を泣かせて、「これを抱け、これを抱け」と言ってくるそうだ」などと、ある者が言い出した。そこにもう一人が「では、これからその渡りに行って渡ってみようではないか」と言うので、平季武という者「自分がこれからすぐにも、そこに行って渡ってやろう」と言う。

他の者たちは「一騎当千の強者であっても、その渡しを今すぐに渡る、ということはお出来すまい」というので、平季武は「お安いことだ。これから渡ってやろう」と言い放つ。居合わせた者たちは「いくら何でも渡ることはできない」と言いつのつた。

季武も、こう言い放ってしまった後には引けない。強硬に言い争ったが、相手は十人ほどにもなったので、「賭ける物が

ないでは面白みがなかるう」と、鎧甲に弓や 胡録、鞍を置いた優秀な馬、反りの強い素晴らしい太刀などを、それぞれに取り並べて賭けの料とした。

また季武も「もし自分が渡ることが出来なかつたなら、同じ程度の物をさしたそう」と約束をして、その後「確かに」と念を押す。相手たちは「もちろんだ。遅いぞ」と促すので、季武は鎧甲を着け、弓・胡録を背負って、従者も連れずに出発しようとした。だが「渡った証をどうするか」と誰かが問うと、季武「背負ったこの胡録の矢を一本、対岸の岸の土に挿して帰ることにしよう。朝になって見に行くがよい」と言い残して出発する。

その後、この言い争った者の中で、若く勇ましい者三人ばかりが、季武の川を渡る一部始終を見届けようと、密かに季武の馬に遅れまいと走り追いかけた。季武はまもなくその渡しに行き着く。

季節は九月の下旬で月もないころで、あたりは暗闇。季武は川にさぶりと入り、たちまち対岸に渡り切った。後をつけてきた者たちは、岸のこちらのスキの草むらに隠れて、聞き耳をすましている。季武がどうやら対岸に渡り着いて、水を切る音がする。矢を抜いて地面に挿しているのだろうか、しばらくあつてから、また引き返して渡ってくる様子。そのとき川の中程に來ると、女の声がしてはつきりと季武に「これを抱け、抱け」と言っている。また赤ん坊の声で「おぎやあ、

おぎやあ」と泣く声が聞こえる。辺りに生臭い臭気が川からこちらの岸までただよってくる。後を追ってきた三人は、怖しく髪の毛が太るほどであった。まして川を渡る季武の心境を想像するに、半ば死んでしまいそうな気がする。

さて、当の季武は「さあ抱いてやろう」と、手を伸ばすと、女「これだよ、ほら」と手渡す。季武は袖の上にその子を受け取る。女は季武の後を追いつながら「さあ、その子を返せ」と言う。季武「今は返さぬ」と言いながら、こちら側の岸に上がってきた。

こうして、館に帰ると、三人も後に付いて走り帰った。季武は馬から下り館に入ると、争っていた相手に言うに「おぬしたちは、大層に言いつのつたが、例の渡りに行き、川を渡り、子どもまで取ってきたぞ」と言い、右の袖を開いて見れば、ただ木の葉だけが、僅かにあつたのみだった。

その後、密かに後をつけていった三人の者たちが語ると、語られる話に、行かぬ者たちまで、死ぬほどの恐怖を覚えたものだった。さて、約束の通りの賭けた物をみな取り出してきたが、季武はそれを取らず、「ああ言ってみただけだ、これくらいのことできないでどうする」と、賭け料は皆もとに返し受け取らなかつた。このことを聞いた者は皆、季武を褒め称えたということだ。

この産女というのは、狐が人を誑かす

ものだと言う者もいる。また、女が子を産むときに死んだ者が幽霊になったものだ、という者もいる、と語り伝えられているとか。

《コメント》

藤原頼光の家来たちには、四天王といって、剛胆な強者がそろっていること有名です。この筆頭・渡辺綱の「一条戻り橋」での鬼退治をする話しは有名です(平家物語)。

さて、この舞台になっているのは美濃地方の大きな川の渡しですが、これは長良川の河渡(合渡)の渡しに当たると推定されるという旨が、岩波文庫版の解説に出ています。この地名は、現在の岐阜市に存在し、そこには大きな橋が架かっています。ここは私の卒業した高校のごく近くにあり、歴史が身近に感じられることです。

この話しの産女とは、出産で死んだ女の幽霊なのだということですが、単に出産をする女という意味の用法もあり、この用法では本誌第九二号の話「産女、山科に行き鬼に会って逃げる話」があります。昔出産は女性の命がけの大事業だったので。

B級サラリーマン渡世譚 (66)

明石 幸次郎

担当者の役割(その19)

T本の話が終るとM田課長は、明石の質問に対し「韓国に部品調達調査に始めて行ったのは三年前になる。今年三月で三回目やね。三年前は君にサンプルの輸入手続きをして貰ったが、あの時は、日本と比較して二〇パーセント位安かったが、品質に問題があり、輸入には、至らなかった。今年は、品質は以前よりは上がったが、価格が二〇パーセント上がると思われていたが、価格が二〇パーセント上がると思われていた。他の何点かの部品も、価格、安定供給、品質に不安があり、こちらから、品質改善のサポートが必要となる。これらのコストを考えれば、当面は韓国からの調達は難しいとの結論に至った」と答えた。

「そうですか。二〇パーセントも上げてくるのは、エラク強気ですね」「まあ、消費者物価は去年二〇パーセント近く上がり、今年の予想は、二〇パーセントと言われているが、これは、軍事政権が政治的に抑えようとしているので、どうなることやら。経済運営が難しい国や。それと、むこうは、供給先は、自分等の値上げを認めてくれない場合は、行き成り出荷停止するようやなあ！日本とは商習慣が大分違うね。まあ、国が違えば、違うのが当たり前だけど。逆に、韓国から見れば、日本の供給先は易しいと思ってい

るかも知れないよ。日本は値上げを主張しても、それが一〇〇パーセント認められなかつとしても、お互いがどこかで妥協点を探り、供給先も出荷停止などは、まず、言わずに出来る限り努力するわなあ〜」

明石は、M田課長の商慣習の違いの話しに交渉のヒントを貰ったと思い「そうですね。日本側の最初から供給責任を果たそうという誠実な態度は逆に、買う韓国側を強気にさせるのかも知れませんね。また、韓国は日本と違って、供給先が少なく、その供給先同士が競争していないのかも知れませんね。」M田は「そうですね。部品メーカーも少なく、下請けと言われる会社もまだまだ、少ないし、育っていない。日本は戦前から、町工場が努力し技術力をつけ、その数も多く、お互いが競争していたから、戦艦大和も作れたんや。そこが違うね」「そうですね」と答えた。

明石は、話を聞きながら韓国のD工業もこちらから、部品を買わないと完成品を組み立てられない立場にある。それに韓国の物価上昇率を考えて、最初から二〇パーセント以上の値上げを提示すれば、良かったのにと心の中で思った。

T本が「ところで、向こうに行つて、どれ位の値上げをしないとイケないの？」と問いかけられ「そうですね。前任者が五パーセントまでは、認めてくれてたと言つてますが、最低八パーセントまでは、

いかなことには、輸出部としては、工場に責任が果たせないと上から言われてます」と言つたら、M田課長が「明石君、

二〇パーセント以上の値上げの理論武装や。色々論理的に話をして、後は、どこで妥協して相手の立場も守つてやるかやなあ。君も資材をやつたから、営業マンを見る目はついているやろ。今度は、向こうの購買マンから、見られる立場や。購買マンの心理が分かるのは、交渉をする君に取つては、有利や。これも経験、経験と購買マンから信頼を得ることが大事や。まあ、初打席でタイムリーヒットが打てるチャンスが出てきたと思つたらいいやないか。高校時代を思い出して、思い切りバットを振つてきたらハッハッハー」と最後は笑いながら、激励された。

この元上司の存在は、有り難いもので、この人の人柄と誠実さに改めて感謝の気持ちで一杯となつた。

明石は最後に女子社員が出してくれたお茶を飲んで「韓国語の歌でも覚えて、あちらの人と仲良くなつてきますわ！有難うございました」と言うT本が「明石君、余りバットを振つて、あちらの女性と仲良くなつたらアカンで！」と忠告された。お茶を飲み干してから「それでは、T本さんの忠告は、有難くお聞きしておきます。お邪魔しました」と言つて笑いながら席を立つて、お茶を入れてくれた女性に「俺、資材部が実家やと

思つてるので、輸出部で苛められたら、又、来るので、慰めてね。宜しく」と言つてから資材部を出た。

M田課長が言つたことを反すうしながら、輸出部に戻り、直ぐにレポートと交渉のための再見積もりを作り始めた。

兎に角、最低一〇パーセントの値上げを認めてもらう為には、一五パーセントの値上げの数字を提示し、交渉のスタートラインとしようとした。

三時を廻つた頃に、宇都宮工場のS沢から電話が掛かつてきた。「明石さん、納期短縮は、条件付でOKです」と言つたので「S沢さん、その条件とは、具体的にどういう事ですか？」と問うと、S沢は少しきまりわるそうに、

「資材のMちゃんが、納期が厳しい部品に付いて、午前中に部品メーカーに出向き確認したところ、短縮に依るが、工程のやりくりで、ロスが出るので、今回に限り現行価格より五パーセントは上げて欲しいと言われた。それを、今日中に了承するかどうかの返事をしたいと言う事と、物流課のK定さんが、出荷短縮に対応する為には、作業員一〇人程度は、

毎日二時間は残業させないと、出荷対応が難しいので、労務費のUPが見込まれる、これは、管理課に申請しなければいけないので、この分は、韓国側にコストUPを認めさせて欲しい。以上この二点を、明石さん、了解してもらつたら、納期短縮に工場として責任をもって協力し

ますので！」と明石の決断を促した。

「S沢さん、二点とも了解します。私もこの前まで工場にいましたから分かります。コストUP分は必ず、値上げ分に乗せします。約束します。資材のM本には事前に連絡して、価格UP要求されるので、M本の判断で即答するようにと、それとなしに言つてましたが一。あいつも、あの顔に似ず、真面目と言うか、自分で腹を括つたらエエのにね！」と返事をした。

「明石さん、分かりました。それと申し訳ないですが、その了解事項をウチの工務課長と管理課長に書面に書いてFAXしてもらえませんか？」

「なんぼでも、FAXしますので、キーマン二人によく頼んでおいて下さいよ。特にM本には、遅れたらペナルティを取るぞ！と脅かしておいて下さいね。有難うございました。宜しくお願ひします」と言つて頭を下げて、受話器を置いた。



困生

一

この文章が「芥川たより」に掲載されるのは新年を迎えた後のことでしょう。

例年のことですが、年の暮れには忘年会、年が明ければ新年会と飲酒の機会は事欠きません。「飲酒は我が日本の美風」だの

「酒は百薬の長だ」などとうそぶいていい気になって度を過ぎると翌日はひどい目にあいます。二日酔いです。漢詩では二日酔いは「中酒」、つまり「酒にあたる」といいます。幕末の漢詩人藤井竹外にそのまま「中酒」という作品があり、二日酔いの辛さを述べています。身に覚えのある方はぜひともとくと味読あれかし。

中酒今朝起更遅

如愁如夢又如痴

山妻怪我偷失笑

想到唐賢落第時

酒に中りて今朝起くること更に遅し

愁いの如く夢の如く又た痴の如し

山妻は我のひそかに失笑するを怪しむ

想い到るは唐賢の落第の時

二日酔いの朝はいつも以上に起きにくいもの。頭はズキズキとし歩こうとすればまだ酔いが残っているのかフラフラしまともに動けない。おまけに妻の視線は厳しく自分がもらした失笑も理解もしてくれない。唐の詩人たちが科挙に落第し

たときの辛さと自分の二日酔いの辛さとが同じだろうかと自分が思つて、ついにらした笑いを。

竹外の詩はおおよそ以上のような内容でしょう。ひどい二日酔いの辛さを科挙（上級の国家公務員採用試験。その難しさは現代日本の公務員試験の比ではない）に合格しなかった気分と同じだというのはおもしろい表現ですが、「落第の」気味は酒にあたるが如し」という唐の詩人の詩句もあるように漢詩の世界ではよく知られた比喻です。また「山妻」とは「山の神のような恐ろしい形相をした妻」という意味ではありません。「自分の妻」をへりくだった言い方で「荆妻」「愚妻」と同じ意味の語です。しかし、二日酔いをしてなかなか寝床から出て来ようとしないう亭主を「こんなになるまで飲むなんて。何を考えているのよ。」とにらみつける奥さんの顔は、二日酔いに苦しむその亭主には「山の神」に見えるかもしれません。恥ずかしながら筆者にも何度も経験があります。

実をいえば「中酒」の作者である藤井竹外は、この「芥川たより」にも少しゆかりのある人物です。芥川といえは高槻藩譜代大名である永井家を主と仰ぐ高槻藩は三万六千石。藤井竹外（一八〇七〜一八六六）はその藩士でした。禄高は一五〇石であったといえますからまずは中堅の武士であったでしょう。竹外は漢詩人であったため文弱の徒と見られがちですが、

さにあらず。鉄砲の名人としてかなり有名であったといえます。息子の藤井貞臣（一八三六〜一九一五）も槍術は免許皆伝の腕前であり戊辰戦争では銃卒隊の隊長として活躍したそうですから、藤井竹外の家は同じ武士でも「武」の誉れ高い家であったといえるでしょう。

藤井竹外の屋敷跡は高槻市にある野見神社の北、カトリック高槻教会の隣にあります。高山右近像のすぐ南くらいに竹外の碑が建てられています。

その碑に彫られているのは竹外の代表作「花朝下澱江（花朝 澱江を下る）」です。「花朝」は「春の花咲く大川の朝」、「澱江」とは「淀川」のことです。

「花朝」は有名な白居易の「琵琶行」の中の詩句「春江の花朝 秋月の夜」からとられたのでしょうか。「琵琶行」は都の長安から江州（現在の江西省九江市）の長官へと左遷された作者がかつて長安で琵琶の名手とされた女性が年老い落魄して地方に流れてきた人生の語りと共に感して作った作品です。都会の長安で貴重な青春時代を送り、その美しい夢と長安の魅力的とが一つになった作者と老女が高度な文化から疎外され、都から遠い地でめぐり会ったときに生まれる人間的な共感の深さを感じとれる作品です。かの玄宗と楊貴妃との愛の悲劇を描いた「長恨歌」よりも筆者が好きな作品なのですが、興味を持たれた方は御一読あれ。

「花朝」で気になることを一つ。実は「琵琶行」で、この「花朝」が登場する前後の内容は左遷された地の様子を白居易が語るころなのです。

其間且暮聞何物
杜鵑啼血猿哀鳴
春江花朝秋月夜
往往取酒還獨傾

その間 且暮何物を聞くや
杜鵑 血に啼き猿は哀鳴す
春江の花朝 秋月の夜
往往 酒を取りて また独り傾く

江州の田舎にいる間、その明け暮れに聞こえてくるものは何でしょうか。ホトトギスは血を吐くまで甲高い声で泣き続け、猿は悲しげな、そしてけたたましい声で鳴きます。春の花咲く大きな川の朝、秋の月光の夜。そんな時、わたしはどうかすると酒瓶を取って一人でグビグビと飲むのです。

この「琵琶行」のイメージからすると「花朝」には大河が流れているノンビリとした片田舎のイメージがあるのですが、高槻、それも淀川近くでホトトギスはともかく「ギーキーキヤツキヤツ」という猿の鳴き声はたぶんしないでしようから、あくまでも竹外の謙遜なのでしょう。せっかくだから「花朝下澱江」を大急ぎで紹介しておきます。詩として品のよい秀作ですから。

桃花水暖送輕舟
背指孤鴻欲沒頭
雪白比良山一角

春風猶未到江州

桃花水暖かにして輕舟を送る

背指す孤鴻 頭に近せんと欲するを

雪は白し 比良山の一角

春風なお未だ江州に到らず

「桃花水」とは二月（旧曆です。今の三月にあたります）の黄河の異名です。二月の黄河は雪解け水がどっと流れ出てきてかなり荒々しい流れとなるようですが、もちろん、ここでは二月の淀川のこと。竹外はおそらく伏見から舟に乗ったのでしよう。ひよっとしたら落語に出てくる「三十石舟」に乗ったかもしれない。輕舟は輕い舟ではなく輕やかに進んでいく舟、「背指」は振り向いて指さすことです。「孤鴻」とは一羽の大きな鳥のことですが、高槻あたりを流れる淀川べりで飛んでいる大きな鳥といえればアオサギでしょうか。現代語訳は付けませんが自由な味わってください。

言わずもがなのことですが、この詩に關して「伏見から大阪に下っていく舟から比良の山々は見えるであろうか」といった無粋な疑問を持つことは不要です。冬が去り暖かな春が来た淀川の実景から詩人はまだ冬去らぬ琵琶湖畔の地へと思いをはせているのですから。古人も言う通り詩人の魂は「尽日 魂は飛ぶ万里の天」というものなのです。

この詩が安政五年（一八五八年）刊行の「竹外二十八字詩抄」と題された詩集の巻頭に発表された頃、浦賀にペリーが

来航してすでに五年の歳月が過ぎており、安政の大獄が始まろうとしていました。

幕末の血生臭い喧噪が竹外の耳にも届いていたでしょう。「血は桜の如し」とか「我を狂と呼び賊と呼ばんも他の評に任す」といった言葉が詩の中にあふれかえっている当時の世情の中で、「中酒」のような詩があることに筆者は少しほっとします。

二

実をいうと「唐詩選」ではよく見かける酒にまつわる詩が日本の漢詩にはあまり多くはありません。たとえば唐の王維（六九九？〜七六一）の「元二の安西に使いするを送る」では遠く旅立つ友人を送る思いを表現するのに酒を材料としています。

渭城朝雨裏輕塵

客舍青青柳色新

勸君更尽一杯酒

西出陽關無故人

渭城の朝雨 輕塵をうるおし

客舍 青青 柳色新たなり

君に勸むさらに尽くせ

西のかた陽關を出づれば故人無からん

この詩で元二との別離の場で王維は遠い安西の地に旅立ちとうとする彼に「君に差し上げよう。もう一杯、もう一杯の酒を。陽關の向こうにはもう飲み合う知人はいないのだから」と酒をすすめています。友人との別れの間では酒はなくてはならぬものだったのです。

もう少し詳しく王維の詩についていうと

渭城とは咸陽のこと。秦の都のあったところで長安の西にあります。唐代では西に旅立つ人をここで見送るのがならわしでした。陽關は敦煌の西南約七〇キロの地。玉門関と並んで漢代以来、中国国境の関所がおかれていました。安西は今の新疆ウイグル自治区のクチャ。当時は唐の西域政略の拠点でした。「行けよ、三千里の彼方に。君を送れば暮寒が身にしむのだ」とばかりに見送る人、見送られる人がこの咸陽の地で飲みあったことでしょう。

ただし、王維も酒を飲んだかというところでもそうではないようで、熱心な仏教徒であった王維がガブガブと酒を飲んだはずはないという意見があるのですが、さてどうでしょうか。そう言われてみれば確かにこの詩には宴会のドンチャン騒ぎとは一線を画した静かな雰囲気があります。「今日はトコトン飲ましてくれ」という友人を穩やかに優しく見つめる目というものも感じられます。

友人との別離の情だけでなく、郷愁や老いの悲哀の表現にも酒は詩の材料としてよく使われました。

万里悲秋常作客

百年多病独登台

艱難苦恨繁霜鬢

潦倒新亭濁酒杯

万里 悲秋 常に客となり

百年 多病 ひとり台に登る

艱難はなほだ恨む繁霜の鬢

潦倒 新たにひとり濁酒杯

杜甫「登高」

都を去ること万里の地に私は秋を悲しみながら来る秋も来る秋もいつも旅人であり、生涯を病気がちに過こしてきた私はたった一人でこの山の高台に立っている。あいつぐ難儀のために鬢がずいぶん白くなったことをとても恨めしく思う私は投げやりな気持ちになって口に運ぶ濁酒杯を今あらたに押しとどめて感慨にふけるのである。

この杜甫の「登高」でも五十六歳（杜甫が生きた一二五〇年前では十分に老境といつてよい年齢であろう。杜甫はこの詩を書いたのは二年後に亡くなる。）の重陽の日を迎え、苦難の続く日々を送りここに至った思いを「潦倒 新たにひとり濁酒杯」と表現しています。

「顧みれば恥ずかしきことの数々、それを思えばもはや杯を重ねるあたわず」とうそぶいている筆者よりもズンと重い感慨が杜甫のこの詩にはあります。

こうした酒を材料にして自分の感情を吐露した作品が日本の漢詩には少ないのですが、ましてや「酒を飲む」そのものを対象とした詩は稀です。その少ない例の一つが画家としても有名な浦上玉堂（二七四五〜一八二〇）の作品です。題して、そのものずばり「飲酒」。

朝酒三四杯 朝酒に三四杯

晚食一饜肉 晩には一饜肉をくらう

涼風吹面来 涼風面を吹いて来たり
酔味快且熟 酔いと味とは快かつ熟す

玉堂は朝から三四杯の酒を飲んでいま
す。三四杯の酒がどのような酒器で飲ん
でいたか不明ですが江戸時代の猪口は今
より今に比べてやや大きかったといいま
すから、玉堂はかなりの「呑み助」であ
ったようです。晩に食べるといっている
「一嚮肉」とはイノシシの肉。イノシシ
の肉は「山鯨」ともいわれ江戸時代でも
よく食べられていました。「熟」とはイノ
シシの肉がよく煮えてこつてりとした味
に仕上がっていること。たぶん豚の角煮
のようになっていたのでしよう。朝から
飲み続けている酒でいい気分となってい
る上に酔いでほてった顔に当る風も涼し
くて気持ちがいい。おまけに目の前には
おいしそうに煮上がった山鯨。「極楽、極
楽、もう最高だよね」と言いたげな詩で
す。

三

最後に「ちよつぱりお酒も飲んだわね」
といった少し訳あり気味の漢詩を紹介し
ます。それも作者は男性ではなく女性で
す。

江戸時代の女流文学者といえば「朝顔
につるべ取られてもらい水」の加賀の千
代女（一七〇三〜一七七五）一人くらい
しか思い浮かびませんが、女流漢詩人は
幾人かいます。その中でも有名な二人が

幕末に同じ地域で現れたことにちよつと
驚きます。一人は著名な漢詩人であった
梁川星巖の妻となった張紅蘭（一八〇四
〜一八七九）中国人みたいだが、ペンネ
ームで張は先祖の地である尾張の張から
とつたらしい。もうひとり江馬細香
（一七八七〜一八六一）。どちらも美濃の
大垣に生まれました。しかも残っている
史料からすると二人は友人どうしであつ
たらしいというのですから、さらにビツ
クリです。

ここで紹介する漢詩は江馬細香の作品。
詩の題は「砂川にて飲す 賦して山陽先生
に呈す（砂川でお酒を飲みました。その
ことを詩にして山陽先生に差し上げま
す）」です。「砂川」とは京都の鴨川べり
にあつた地名らしいのですが、どこなの
かはよく分かりません。「砂川」の地で頼
山陽と酒を飲んだときの詩で山陽への気
持ちがにじみ出ている詩です。

好在東郊売酒亭

秋残疎雨撲簾旌

市燈未點長堤暗

同傘歸來此際情

好し 東郊の売酒亭に在り

秋は疎雨を残して簾旌をうつ

市燈は未だ点せず長堤は暗し

傘を同じくして帰り来たる此の際の情

「好し」とは「よかつたわ」といった意
味でしょう。「売酒亭」は料亭のこと。頼
山陽は売れっ子の漢詩人、しかも大ベス
トセラー「日本外史」の作者ですし、細

香は大垣藩の藩医の娘ですから安っぽい
居酒屋で飲むことはまずないでしょう。
「簾旌」は酒屋の「すだれ」や「のぼり」。
「長堤」は鴨川の堤のことで「同傘」と
はもちろん「相合い傘」のことです。ほ
ろ酔い気分が相合い傘をしながら少し薄
暗い堤上を歩いて行く男女。細香は三十
八歳で独身、山陽は四十五歳、妻も子も
ある身でした。

この詩から不倫あるいは愛人関係と読
み解くか、いや、これほど大つばらに書
いているのだから清らかな男女関係だろ
うと見るか、昔から議論のあるところで
す。お好きなようにとってください。

どれだけ細香の気持ちにそって訳せるか
自信はないのですが、あえて現代語で解
釈すると次の通りになります。

「今日は、京の東、砂川の料亭に来てと
てもよかつたこと。秋の暮れ、気づけば
パラパラと雨の音。さあ、早く帰りまし
ようか。街は、まだ灯はつかず、長く続
く鴨川の堤はまっくら闇。山陽先生と相
合い傘で街へと帰ってくる。ああ、この
時の私の気持ちはどんなであつたか、先
生、お分かりになりますかしら。」

江馬細香と頼山陽とが初めて出会った
のは文化十年（一八一四）のこと。細香
は二十七歳。この時代ではすでに老嬢と
いうべき年齢でした。父親の江馬蘭齋は
藩医（すぐれた蘭方でもあり杉田玄白や
前野良沢の弟子であつた。）にして儒学者
であり、細香は四十九歳でもうけた娘で

した。父親としては非凡な聡明さをもつ
た娘をなかなか手放す気にはなれなかつ
たのでしよう。この婚期の遅れた細香を
山陽が見初めて何度か大垣の江馬邸を訪
れています。

あるイギリスの劇作家が「恋人と別れ
て帰る気持ちは学校に行くときの生徒の
よう」といつていますが、細香と別れた
後のそんな気持ちを彼女と別れて京に帰
ろうとする際の詩に書き残しています。
有名な「舟もて大垣を発し桑名に赴く」
という漢詩です。

蘇水遙遙入海流

櫓声雁語帶鄉愁

独在天涯年欲暮

一篷風雪下濃州

蘇水 遙遙として海に入つて流る

櫓声雁語 郷愁を帯ぶ

独り天涯にあって年暮れんと欲す

一篷の風雪 濃州を下る

木曾川は遙かかなたまで流れて海に連
なり、船頭の操る櫓の音と空を渡る雁の
声がもの悲しく故郷を思い起こさせる。
まして故郷から遠く離れた地を旅して、
年の瀬も近い今しも、降りしきる風雪の
中、私は一艘の小舟に乗って美濃の地を
下っている。

「これは郷愁の詩だ」と言ってしまうそ
うですが、結句にある「濃州を下る」は
たぶん李白の「君を思へども見えず渝州
に下る」（峨眉山月歌）を踏まえているで
しょうから、この詩全体からは周りの

寒々とした風景の中に君の姿は見えないと嘆く山陽の切ない気持ちがかがえま
す。恋する女性と別れて一人帰って行く
悲しくさびしい気分は洋の東西を問いま
せん。

この詩を作った翌年の春、山陽は人を
介して正式に蘭齋に細香との結婚を申し
込んだのですが、厳格な蘭齋から「お前
は放蕩の徒だ」といわれ断られます。こ
のため細香は生涯未婚の身となり、子弟
という間柄ではありますが山陽とは即か
ず離れずの關係となった次第。

ここまで書いてくれば砂川の料亭では
る酔い気分となつて暮れゆく鴨川堤を歩
いてく二人が、それからどうなったのか
気になる筆者の心も理解していただけよ
うというもの。もしも江馬細香女史に尋
ねたら「ダスの勘ぐりよ。お馬鹿さんね。」
と言われそうですが。

四

酒に関わる漢詩をネタに下手な三題噺
のようなことを書いてきましたが、どう
も私たち現代の日本人にとって漢詩文は
縁遠い存在のようです。若い人だけでな
く中年くらいの人に「漢詩文はどうです
か」と聞いてみても「センター入試以来、
見たこともない」という返事が多く返っ
てきます。「詩集というのは売れない」と
いうのが出版界の常識らしいのですが、
ましてや漢詩集となつたら、その出版に
は「清水の舞台の百倍以上高いところか

ら飛び降りる」という覚悟があるとい
うのが正直なところでしょう。その結果と
して漢詩はますます遠ざかっていくわけ
です。

そんな流れに逆らつてという思いがあ
るわけではありませんが、天智天皇の大
津京の時代から二〇世紀半ば河上肇の時
代までのおよそ一三〇〇年間、その間に
無数の漢詩が作られています。それがま
ったく顧みられないというのはいささか
残念といわざるを得ません。漢詩を現代
日本に復活させよという気持ちはまった
くありません。しかし、漢詩という表現
手段によつて自らの心のうちを吐露した
先人たちのことをもう少しだけ理解して
きたいと考えているのです。ひよつとし
たらもうすでに自分が見失っているもの
に出会えるかもしれませんから。

たとえば次の詩です。作者は正岡子規。
明治二八年、親友の夏目漱石が愛媛県の
松山中学に赴任するのを見送る際に作つ
た詩です。本文中に使った「いけよ、三
千里」の句はこの詩から取りました。稚
気あふれる詩ですが、この底抜けの若々
しさ・おおらかさは今の筆者にはありま
せん。詩の題は「夏目漱石の伊予に之く
を送る」です。

去矣三千里 ゆけよ三千里

送君生暮寒 君を送れば暮寒生ず

空中懸大嶽 空中 大嶽懸かり

海末起長瀾 海末 長瀾起る

僻地交游少 僻地 交游少なく
狡兎教化難 狡兎 教化しがたし
清明期再会 清明 再会を期す
莫後晩花残 おくるるなかれ おそき花
のつぎるに

「君は旅立っていく。三千里の彼方へ。
君を見送れば夕暮れの寒さが押し寄せる。
君の行く地では空中に見上げるほどの山
がそびえ、海の彼方には長大な波が起き
ていることだろう。かたいなかの地では
親しく付き合う友人も少なく、ずる賢い
子たちは教え導くのも難しかろう。来年
の三月の再開を約束しよう。遅れまいぞ。
遅咲きの花がすっかり散つてしまふ時
に。」

子規の俳句集や短歌集はいろいろと出
版されているのですが、彼の漢詩を読も
うとすると子規の全集をみるしかありま
せん。一〇代後半から二〇代前半くらい
までの子規を理解しようとするには貴重
な材料だと思つたのですが、残念です。



我がおくのほそ道の旅 (22)

成瀬 和之

「松島」

お正月らしく、江戸時代から日本を代
表する絶景のお話です。

日本三景とは、京都府の天橋立、広島
県の宮島、宮城県「松島」です。

そして今回は芭蕉が訪れた「松島」に
ついてです。松島の港の入り口に「松島
や ああ松島や 松島や」という「句碑」
が立っていて、芭蕉作と伝えられていま
すが、テレビ番組プレバトの夏井いつき
先生の判定にかかると、「ダメ出し」をさ
れるでしょう。これは、近代に作られた
観光用のコピーで、芭蕉とはまったく無
關係の駄句です。

芭蕉の「おくのほそ道」の「松島」に
は、「はせを」の句は一句もないのです。
冒頭文とともに「日光」のところ、曾
良（そら）と「松島」の美景とともに眺
めたいと伏線をはっておいて、いざ、「松
島」のところは芭蕉の句は一句もない。
あるのは、「松島や鶴に身を借れほととき
す」という曾良の句のみです。これは一
体どういうことでしょうか？

芭蕉の「おくのほそ道」は、単なる「紀
行文」ではありません。紀行文に一句「は
せを」の句を付け加えただけという単純
なものではないのです。その決定的な証
拠を突き付けたのは、一九四三年に、山
本六丁子氏により『曾良 奥の細道随

日記』と題して紹介された、皮肉にも曾良の旅日記だったのです。

しかも芭蕉は、「奥の細道の旅」を終えてから5年がかりで、死ぬまで推敲に推敲を重ねたのです。これを「文学作品」と言わずに何としようか。「奥の細道」が「おくのほそ道」と表記を改めたのも、その表れかも知れません。

芭蕉の俳句がないからと言って「松島」のところに価値が減ることには、決してなりません。「松島」の散文のところこそ「声に出して読みたい日本語」(斎藤孝)にあやかって、近松門左衛門の「曾根崎心中」とともに「声に出して読みたい日本文学」と言える美しい文章なのです。

(現代語訳)

そもそも、多くの先人たちの文藻に言いふるされていることではあるが、松島は日本第一の絶景であって、まずは中国の洞庭・西湖に比べても遜色がない。その地勢は、東南の方角より海を入れて入り海をかたちづくり、湾内三里、かの浙江を思わせる満々たる潮をたたえている。島という島のあるかぎりをここに集めて、そのうち高くそびえるものは天を指さす尊大の形を示し、低く横たわるものは波の上に匍匐膝行する恭敬の状を呈している。あるいは二重にかさなり、三重につき重なって、左に分かれているかと思えば、またあるものは右に連なっている。小さい島を背負ったような形のものもあれば、抱いているような姿のものもあり、杜甫の詩にある

ように、あたかも子や孫を愛撫しているかのごとくである。松の緑も色濃く、枝葉は潮風に吹き曲げられて、その曲がりくねった枝ぶりは、自然のうちに、まるで人工をもって曲げたとのえたかのように思われる。その景色の美しさは、見る人をして恍惚とさせ、かの東坡(とうば・中国の詩人)の詩にいう、美女がいやが上にも美しく顔を化粧したかのごときおもむきがある。これは遠い神代の昔、大山祇(山を司る神)のなしたしわざであろうか。かかる造物主の霊妙な仕事をば、いったい何人が彩管(絵筆のこと)をふるい、詩文をおどらせ表し尽くすことができようか。いや、できない。

出典：角川ソフィア文庫「おくのほそ道」

(原文)

抑ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖を恥ず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。嶋々の敷を尽くて、歌ものは天を指、ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左に分かれ右につらなる。負あり抱あり、児孫愛すがごとし、松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈折をのづからためたるがごとし。其気配、宵然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山づみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ。

出典：大垣市 奥の細道むすびの地記念館
図録ノート

(おわりに)

松島のくだりは『おくのほそ道』の中でも生き生きした文章でつづられているうちのひとつです。芭蕉の高揚した筆は、松島の日本第一の風景(扶桑第一の好風)に賛辞を捧げながら次々に変わる海上の眺めを、島々を描いてゆきます。沈んだ文章でつづられる『おくのほそ道』第二部のなかではひととき華やかです。

芭蕉はなぜ松島のくだりを高揚した筆で描くことができたのか。ひとつの理由は『おくのほそ道』の冒頭に「松島の月先心(まづこ)にかりて」とあったとおり、松島こそ芭蕉が訪ねたいと思った第一の場所だったからです。

もっと大きな理由は松島が現に存在していたことです。松島に来てみると夢に見たとおりの、いやそれ以上に美しい松島がそこにあつた。芭蕉はこれがうれしかったに違いありません。

そこで自分の句をわざとはずして、いわば文章を破って大きな風穴をあけたのです。芭蕉はこれを『おくのほそ道』の最大の山場でやつてのけたのです。

『NHK二〇〇分de名著 松尾芭蕉 おくのほそ道』(長谷川權著 NHKテレビテキスト) 参照

『おくのほそ道』という「文学作品」の価値を「松島」の散文のところまでこそ「はせお」は示したかったのだと思います。

隠された歴史(3)

満田 正賢

「日出処の天子」とは誰か

前月号で、「日出処の天子」が聖徳太子であるという説は少なくとも平安時代の近畿王朝には全く伝わっていない話であり、日本からの留学僧が「日出処の天子」は用明天皇であるという、年代的に一致しない話を無理矢理ひねり出して宋の朝廷に報告していたということをお伝えしました。古田史学の考え方については、『日出処の天子』は誰か―よみがえる古代の真実』という本がミネルヴァ書房から出版されています。この本の中では「日出処の天子」は筑紫王朝の王であるという説が展開されています。興味をお持ちの方はぜひともお読みください。

私は、それに対し、「日出処の天子―阿每多利思北弧」の国書奏上記事は、「蘇我馬子が法興寺(飛鳥寺)の内部の充実の為に、筑紫王朝に圧力をかけて自ら「日出処の天子」と称した国書を持参させたものがあった」と考えています。隋書倭国伝には、新羅・百済が倭国を大國とみなしているという記述があります。新羅・百済が倭国を格上の国という意味で大國と表現していることはありえませんが、「大國」というのは領土面積上の大きさであり、日本列島全体を倭国領土とみなしていると考えるべきです。

隋書倭国伝の一連の記述には阿蘇山、

鯨面文身など近畿地方の記述と見なせないものがあります。中国の他の文献から抜粋したものとすることも考えられなくはありませんが、これも隋の使者の報告書からの抜粋と考えた方が自然です。古田説では、阿蘇山の記述を根拠の一つとして日出処の天子が近畿ではなく九州にいたと考えるわけですが、これについては、私が魏志倭人伝の検証において考察したのと同様に、隋書倭国伝は複数の報告書の記述を組み合わせて編纂したものだと考えれば説明が付きまます。私は、魏志倭人伝においては不弥国までの「〇里」の記述をした報告書と不弥国以降の実際の渡航日数を記載した報告書が組み合わされたかと考察しました。隋書倭国伝においても倭王「阿每多利思北弧」を訪問した文林郎裴清の報告書と筑紫国に留まり筑紫国の周辺を見学して回った文林郎裴清の随行者の報告書を組み合わせて編纂したものであると考えれば九州関連記事があるという矛盾は解決します。

秦王国について

隋書倭国伝には文林郎裴清を倭国に遣わすという記述の後に百濟から都斯麻国・一支国・竹斯国・秦王国・十余国を経て海岸に達するという記述があります。上田正昭氏は「渡来 of 古代史 国のかたちをつくったのは誰か」(角川選書)において大宝二年(七〇二年)の豊前国戸籍には大變多くの秦部姓が存在しているこ

とを指摘しています。そして豊前国には秦氏のグループが集団として居住していたと考察しています。秦王国とは文林郎裴清一行が筑紫国の次に訪問した豊前国のことであり、文林郎裴清一行は豊前国から東に瀬戸内海を水行したことが想定できます。

「日出処の天子—阿每多利思北弧」は蘇我馬子である。

「阿每多利思北弧」の使者が隋に朝貢したのは六〇七年です。蘇我馬子が物部守屋を殺害したのが五八七年で、崇峻天皇を殺害し女帝である推古天皇を即位させたのが五九二年です。蘇我馬子の死去は六二六年ですが、六〇七年は蘇我馬子の絶頂期です。そして蘇我馬子こそが仏教を導入し、冠位十二階を制定しました。後世それらの業績は厩戸皇子(聖德太子)のものとされましたが、日本書紀において一連の馬子の業績隠しが行われたのは明白です。

「阿每多利思北弧」の使者の隋朝貢記事は乙巳の変(蘇我入鹿の殺害)において滅亡させられた蘇我宗本家の長・蘇我馬子が計画した行動であったが為にいつさ日本書紀から削除されたと考えると納得ができません。

隋書倭国伝に倭王は「天をもって兄となし、日をもって弟となす。日の出とともに政を弟に委ねる」という記述があります。ここでいう弟は必ずしも男である

必要はありません。「日本書紀」欽明紀に「皇后の弟を稚綾姫皇女と曰す」という記述がありますが、当時年下の兄弟・姉妹はすべて弟(オト)と呼んでいます。推古天皇の母は蘇我稲目の娘・堅塩媛であり、蘇我馬子と推古天皇の関係は伯父・姪の関係ですが、推古天皇は蘇我馬子のことを舅と呼んでいます。逆に蘇我馬子は自らの傀儡である推古女帝を「妹弟」と呼んでいたのではないのでしょうか。

「阿每多利思北弧」という名前に関して言えるのは、これは近畿王朝の天皇の名前ではないということです。しかし「阿每多利思北弧」が筑紫王朝の王の名前であるとも考えにくいのです。過去筑紫王朝の王が自称した名前は「讚、珍、濟、興、武」です。筑紫王朝が南北朝の終りに中国の冊封体制から抜けた為中国風の諱を使う必要がなくなつたと考えることもできますが、後で触れる日本書紀の遣唐使記事中の「別倭種」韓智興、趙元寶の二名が筑紫王朝の派遣した使者であるならば、筑紫王朝はまだ隋・唐の時代においても中国に対しては中国風の諱を用いていたと考えられるからです。

一方蘇我馬子であればどうでしょうか。戦国時代の「武田信玄」は源氏の嫡流であることを誇示するため自らは「源晴信」と名乗っています。蘇我馬子も自らの出自を誇って「アメ」||「天」という名前を用いたのではないのでしょうか。なお、

古田氏は「阿每多利思北弧」を「天足鉾」と考えると日本書紀において垂仁紀(古事記では応神紀)に渡来したとされる新羅王子「天日鉾」と類似した名称になると考察しています。現時点では「天日鉾」と蘇我氏との関連性は見つかっていませんが、いずれにしても「天日鉾」という名称は記紀に記載された名称であり、筑紫王朝固有の名称ではなく、近畿王朝周辺においても存在しうる名前であると考えることが出来ます。

遣唐使に関する李鐘恒氏の指摘

李鐘恒(イ・ジョンハン)氏は韓国における日本古代史の研究者です。「韓半島からきた倭国・古代伽耶族が建てた九州王朝」(新泉社)古田氏は李鐘恒氏の「韓半島↓日本列島」という一方通行の文化流入の考え方や「伽耶国、原点主義」を批判していますが、その他の記述については、李鐘恒氏が古田説を明確にした上でさらなる考察をしていることを賞賛しています。李鐘恒氏は古田説に従って「阿每多利思北弧」を筑紫王朝の王と見なしていますが、その証明には日本書紀の中で引用されている伊吉連博徳書の記事を用いています。具体的には以下の事例が九州王朝の存在を示す根拠となると考察しています。

①孝徳紀にある白雉四年(六五三年)の遣唐使の記事の中に同行者「別倭種」韓智興、趙元寶の二名の記載がある。

②齊明紀に韓智興の従者、西漢大麻呂及び東漢草直足嶋が日本の使者を中傷したという記事がある。

③持統紀にある天智三年（六七〇年）の唐の捕虜であった筑紫の君薩夜麻の帰国に同行した「弓削連元寶の児」の「弓削連元寶」は趙元寶であろうという日本書紀の注がある。

李鍾恒氏が考察した「別倭種」韓智興、趙元寶の記述は、そのまま遣唐使が近畿王朝の使者と筑紫王朝の使者の合同の訪問であったことを証明しています。そこで重要なのは近畿王朝と筑紫王朝の関係は対立を含みながらも基本的には協力関係であったことです。

筑紫王朝と近畿王朝の関係

古田武彦氏の見解は「近畿王朝の使者は、筑紫王朝の使者の配下（地方の勇者、分流）として、同時にあるいは前後して大唐と交流した」というものですが、国家の関係を考察する上ではその関係が名目上対等であったかどうかという考察と共に実質的な力関係はどうであったかという考察が必要です。

名目上で言えば、当然、筑紫王朝が主であり近畿王朝が従です。なぜならば中国南北朝期の倭の五王の朝貢が筑紫王朝のものであり、隋・唐もそれを認めていたからです。ちなみに倭の五王の記述のある宋書はすでに隋以前の南斉期に編纂されています。隋は倭国伝で倭国の王朝

の一貫性を記載しています。従って近畿王朝の側に立って考えると、隋・唐に対し名目上（形式上）は筑紫王朝を倭国の支配者として持ち上げなければなりません。この点は古田氏の見解通りです。

それでは実質的にはどうだったのでしょうか。近畿王朝と筑紫王朝との実質的な力関係はもはや平等でもなく、近畿王朝が主、筑紫王朝が従であったと考えられます。

第一の理由は五二八年の磐井の乱での和睦以降、筑紫王朝が勢力を盛り返した兆候が見られないからです。磐井の乱は磐井の墓（岩戸山古墳）の破壊などを記した筑後風土記によっても確認出来ます。それをどう解釈するかは別にして、近畿

王朝がこの時に筑紫王朝の勢力を筑前地方に押し込めた事実があったと考えられます。古田氏は、肥後地方の応援等があった筑紫王朝の勢力が最終的には盛り返した可能性もあるのではないかと述べていますが、私が最初に本誌に寄稿させていただいた「今城塚古墳と磐井の乱―九州王朝説から見た古代史―」で明らかにしたように、五世紀後半からは宇土半島近辺には（おそらく葦北国造として）近畿王朝側の強大な権力者がいました。従って、近畿王朝側の軍隊は南からも筑紫王朝に攻め込んだのであり、磐井の乱以降、筑紫王朝が筑前地方に勢力を封じ込まれた可能性は極めて高いと思われれます。

第二の理由は、唐（隋）への訪問時に初めて近畿王朝が筑紫王朝に随行して中国を公式訪問したとみられることです。

日本書紀では雄略紀に呉国への遣使記事はありますが、これは日本書紀が宋書にある倭王武の記述に合わせこんで創作記事を挿入したと考えるべきものです。倭の五王のうち「讚、珍、濟、興」の遣使記事がいつさいなく、それを引き継いだ最後の倭王武の記述だけがあるというのは事実とは考えられないからです。

ところで、今まで単独で使者を派遣していた筑紫王朝が、近畿王朝の使者を同行させなければならなかった理由は何でしょうか。ようなものではないでしょうか。考えられるのは近畿王朝からの圧力です。そして筑紫王朝はそれを拒めなかったということです。

筑紫王朝が「自主的に」「協力的に」近畿王朝の使者を同行させるなどはありません。そこには筑紫王朝が近畿王朝側の要請を受け入れざるを得なかった現実がありました。そして、その背景には筑紫王朝と近畿王朝の実質的な力関係（近畿王朝が主、筑紫王朝が従）が存在したと考えられます。

阿毎多利思北弧の使者の隋訪問記事は蘇我馬子が計画した行動であった。古田氏は、元興寺縁起に書写として残る法興寺（飛鳥寺＝元興寺の前身）にあった丈六仏の光背銘「丈六光銘」の文章に「大隋国使主裴世清」が法興寺を訪問

したと記されていることに注目しました。そして「丈六光銘」に隋書倭国伝にも推古紀にもない裴世清一行の副使の称号と人名「副尚書祠部主事遍光高」が記載されていることをもって「丈六光銘」の記述はなんらかの原資料にもとづくものであろうと考察しています。

古田氏は「丈六光銘」の文章の中に「畢竟して元興寺に座す」という一句があり、これをもって丈六仏が筑紫王朝から「原光背銘」が改竄された上で法興寺に移されたのであろうと考察しています。但し、古田氏はこの考察の最後に補足として括弧付きで「原光背銘には、蘇我氏の功業が賛美されており、「新作光背銘」では、これらがカットされた、という可能性もありえよう。」と付け加えています。

「丈六光銘」は金石文としては現存せず元興寺縁起の中に書写として残るだけです。従って「丈六光銘」は元興寺縁起全体の中で捉えるべきものです。法興寺（飛鳥寺＝元興寺の前身）は蘇我馬子が発願した蘇我氏の氏寺ですが、元興寺縁起にはそのような記述は一切ありません。法興寺（飛鳥寺）建立は用明天皇が推古天皇と聖徳太子に（我が国には尼寺はあるが、法師寺がないので）法師寺を建てる場所を探すように命じたところから始まると記載されています。まさしく元興寺縁起全体が蘇我氏の功業を隠蔽しているのです。従って古田氏は「光背銘の改ざんは蘇

我氏の功業賛美をカットする為のものだった」という仮説を最初に検証するべき

でした。「光背銘の改ざんは蘇我氏の功業賛美がカットされたもの」ということは、

逆に言えば消えているのは蘇我氏の功業賛美の文面のみだということです。そう

いう想定で考察するならば、「丈六光銘」に裴世清一行の副使の称号と人名が記されている事実は、蘇我馬子が唐の使者を

招聘した結果として裴世清一行が法興寺（近畿）を訪問したという証拠となりえます。

又「丈六光銘」が「原資料」に基づくものである限り、「丈六光銘」にある「大

隋国使主」の記述は尊重されるべきものです。仮に唐からの使者の訪問を隋からの訪問であつたと偽るならば、日本書紀

の記述こそ書き換えられるべきものであり、「副使の記載がある原資料」を「大隋

国使主」に改ざんしておいて日本書紀の記述を「大唐国」のままにしているなど

ということは考えにくいことです。やはり、裴世清一行は隋代に來朝したのであり、隋書倭国伝の記述と日本書紀の記述

は重なっていると考えられます。元興寺縁起の「丈六光銘」の記述に関する考察は古田氏の大なる研究の成果

ですが、残念ながら古田氏は蘇我本宗家の実績が日本書紀から抹殺されたという

投稿小説(連載)

見えない人 (3)

古城 悠

◆◆テスト、テスト、テスト◆◆

「うおー、そうだ、そうだよな、どうしてこんな簡単なことに気づかなかつたんだ！」

溢れ出る言葉は、まるで雄叫びである。ここまでもわざと声に出してきたが、それは不安の中で折れそうになる自分を鼓舞するためだった。だが今回は違った。

アルキメデスの「エウレカ!」のように、抑えきれない高揚感がそうさせたのだ。要は缶コーヒーの中身を一気に飲み干し、空になった缶を思いっきり道路に叩きつけた。そして激しく弾け飛んだ空き缶を追いかけ、これでもかとばかり踏みつけて凹ませた。

「見るよ、見てみるよ!、見えないだの聞こえないだのになつてるけど、力を加えたら、こうなるじゃないか、空気になつてるわけじゃないんだ!」

「そうだ、確かにそうだ、ドアの開け閉めもできたしな!」

声色を変えて掛け合いをすれば、それだけで会話が弾んで盛り上がっている気分なり、ますます元気が出る。

「そっか、じゃあれだ、誰かに直接触れば、こつちの存在がわかつてもらえるってことだ」

「ああ、そうだ、缶を凹ませたりドアを

開けたり閉めたりすると同じだ」

二役三役を演じ分けての疑似会話はいつそう活気づく。長々と続く一人芝居、もしこの様子を近くで見ている人がいるとすれば変な奴と思われるところだが、

いまの要は誰にも認識されない状態にあるので、その心配はない。しかし、勢い任せの声出しは、普段なら目を瞑っていたレベルの不安までも言葉にしてしまう。

「でも、ちよつと待てよ、それなら自転車はどうなるんだ、人が乗っていない自転車は疾走しているのを見て、誰も不思議に思わなかったということか?」

「ドアの開け閉めだつてそうだ、人の出入りが無いのにドアが開いて閉まつてないから……」

冷や水を浴びせられたごとく、一気に盛り下がる。他から姿が見えず声も聞かれないということと、物体に触れた時の

感触が得られるということを両立させる説明が必要なのだが、そんな都合のいいものは容易には見つからない。「畜生……、考えろ、考えろ」

頭を抱えて固まるも妙案は浮かばない。それから数十秒、要は顔をバチンと叩いて立ち上がった。

「えーい、構うもんか、試してやれ、試せば何がわかるはずだ」

二階の廊下は心なしか閑散としている。営業の一課から三課までが一つのフロアに並んでいて社員の出入りも少くない。それなのに、どういふことなんだろう。

姿が見えない声が聞かれなくなつて、

自身の見方や感じ方も変わつてしまつたか。それともこれが普通の状態で、いつもの賑やかさは思い込みによる幻視だったか。二課のドアノブに手を添えようとした時、わずかに不安が過ぎる。ノブを

掴んだはずが何の感触も得られず、するとドアを通り抜けてしまふんじゃないかと。思考がひとたびマイナスに傾くと、

あらゆる局面で都合の悪い部分が目立つてくる。ドアの感触はもろろん、空き缶を凹ませた時に足が感じた圧力も幻だつたのではないか、そんなことさえ考えってしまう。

二課のドアノブは普通に触れることができた。中を覗くと机のいくつかは無人となつている。すでに外回りに出かけたのだろう。山田の席に目をやると、机の上にはブリーフェースやパンフレット類が乱雑に置かれているが本人の姿は見当たらない。山田のことだから、どこかで

サボっているに違いない。そうなるならターゲットはおのずと田中に確定する。「どうだ、捗つてるか」

面倒見のいい先輩づらをして後ろから声をかけてみる。声が届かないのはわかっている。反応がなくても驚きはしない。こいつはいまどんな作業をしているのかと覗いてみると、机の上のパソコンでは納品書作成のフォーマットが開かれているが、手許でスマホをいじりながら

芸能サイトを見ている。お気に入りのアイドルグループの近況チェックのようだ。サボタージュの現行犯に対しては後ろからいきなり頭を小突くなりして驚かせてもよかつたが、何がどうなっているのかの把握が目的なので個別の事柄を一つひとつ試していくことにする。

たとえば、要自身は実体的な存在が消失されていて、スマホやパソコンに触れることができるのだからネット経由なら存在を伝えることが可能なのではないか。あるいは要が動かした物体を見ればそこから間接的にでも要の存在をわからせることができるのではないか。そして、それでもわかってもらえない時には、直接、相手の身体に触れることで存在を知らせることができるのではないか等々のテストである。

まず田中のスマホ宛にメールを送ってみる。要の端末には送信完了の表示が出るものの田中の端末が反応している様子はない。電話をかけてみても同じで、手許で呼び出し音が鳴るばかり。どうやらメールや電話による働きかけは途中のどこで行方不明になるらしい。

次に、机の片隅に積み上げられていた書類の山から一枚抜き取ってパソコンのモニターが隠れる形に置いてみる。要の姿が目映っていないのなら、一枚の紙片がそれ自身の意思で動いてモニターを隠しに来ているかに見えるはずだが、それに田中はどう反応するのか。謎の核心

に迫る可能性がありそうな実験に思われ

て、要も恐る恐る試したのだが、田中の反応は意外と素っ気ない。紙が勝手に動くなど不思議でも何でもないとはかりにさりげなくそれを元に戻したのである。暗い室内から屋外に出た時、太陽がまぶしいからといって手を目の上にかざす、それを思わせるくらい自然な所作である。もう一度、同じことをやってみる。田中

はやはり当たり前のことをするように紙を退かせる。机の隅に置かれていたマグカップを目の前に持ってきても平然と元の位置に戻すだけである。無機物は動かないというのは、もしかすると一部の世界でしか通用しない固定観念なのだろうか、この世界では力をかけずして物体が動くことになっているというのか。要の脳裏にとある風景が浮かぶ。愛車のプジョーが無人の状態で車道歩道を巧みに使い分けながら走行している。すれ違ったり追いつけられたりする人々もそれを通常のものとして受け入れているっぽい。技術的に完成をみて法制面でも整備がなされた後の世界におけるドローンや自動運転車両を思えば突拍子もないわけではない。だが、それでも書類やマグカップが机上を動き回るのは、近未来ではなくて付喪神が跋扈する世の中だ。

自分自身の姿が第三者的には見えていないし、声も聞こえていない。それだけでなく物体が勝手に動くことを自然現象の範疇で理解できる、この世界を構成す

る謎が一つ加わった。

三つ目にして最後の実験に取りかかる。直接触れた際の反応を確かめる実験である。要が持っていた常識、すでに過去形で言わねばならないのだが、その常識に照らすなら目に見えない何者かの力が懸かってくるかと気味悪くなるし、場合によってはパニックに陥る。しかしここは昼

日中の付喪神を不思議に思わない世界だ。田中がどんな反応をしたとしても驚くには当たらない。だが、せめてこの世界を構成するルールの一端ぐらいは理解したいものである、とそんなことを思いつつ、要はマウスを動かしている田中の右手にそつと自分の手を重ねてみた。ほんのわずかだったが田中の手が止まった。そして次の瞬間、田中はマウスから手を浮かせて軽く振ってみせる。ハエか何かが手の甲に止まった時、自然にやっしてしまう所作だ。ということは重ねた手の感触は田中に伝わっているのだ。続いて田中の手首を掴んで机の上に抑えつけてみる。最初に一瞬だけ反動めいた動きがあったが、すぐに抑えられるままになってしま

う。抵抗を諦めて力を抜いたのだろう。三十秒ほどそのまま抑えつけておいたが、まったく動きがない。それでも手を放すと何事もなかったかのように作業を再開する。もう一度、手首を掴んで抑えつけてみるが反応は変わらない。同じことを三度繰り返しても意味がないので、乱暴かと躊躇いつつも思い切つてスリーパー

ホールドを仕掛けてみる。触れた感触が

伝わるのは確認済み、加える力を強くすれば相応の反応が返ってくる。しかしスリーパーホールドは何か触れた云々のレベルではない。事実、田中の口からは「ぐげえ！」と嗚咽とも呻きとも言えないおぞましい声が漏れる。十秒ほどカウ

ントしてから腕を緩めると激しく咳き込んでいる。その様子は普通に肉体を有している人間から絞め技を掛けられた時のものと同じだ。突然の変調を心配した隣席の岡本が訊ねたのに対して、田中は「いや、ごめん、なんか急に首が絞められたみたいで……もう大丈夫やし」と答えている。田中には普通に絞め技を受けた時みたく感じられたようだが、その理由を気にする節はない。書類やマグカップが動き回ると同様、そういうことが起きてもおかしくない程度には認識している。そうだ。

背中に気配を感じて振り返ると、山田が立っている。まるで要の姿が見えているかの立ち位置であり間合いだった。要はギクリとして「見えるのか」と口走ったが、山田にはやはり見えておらず、田中ひとり声を掛けた。「お前、午後は外回りだろ、昼飯済ませから出るのか?」「あ、はい、そのつもりですけど」「そっか、じゃ一緒に行くかうか」「昼休みまではまだ十五分ほどあるが気には留めていない。実際のところ、要も

十一時五十分を過ぎると鯖を読むことはたびたびで、鈴木課長もそのあたりは咎めたりはしない。

「山田あ、てめえはサボることと手を抜くことに掛けては天下一品だな、まあいいや、お前の面を見たら試したいことができた」

相手には届かないことがわかっている声で、要は語りかける。実験は田中を被験者に行った段階でおおよそは終了していたが、それに付け足す形で検証したくなつたのが、作用を及ぼした被験者が突拍子もない行動に出た場合の周囲の反応についてである。要の姿が見えないことが原因になって、要の及ぼす作用が超常現象っぽくなつたとしても、田中の認識がそうだったように、たいていは自然現象の範疇に入れられてしまう。ここがそういう世界であることは理解できたが、では作用の影響下にある人間の行為は周囲の目にどう捉えられるのか。作用の直接の受け手の認識を一次的認識と呼ぶなら、周囲の目は作用を間接的に見ていることになるので二次的認識である。その

言い方に当てはめるのなら、要が抱いたのは、自身が及ぼす作用は一次的認識では自然現象になるのかも知れないが二次的認識ではどうなるのかという関心である。

山田と田中が向かったのは、要もよく使う定食屋だった。要の関心を検証するには、山田に何か非常識な行動に出ても

らう必要がある。何がいいだろう？と考えているうちに、注文品がテーブルに並べられる。この日の山田は、ヒレカツ定食を選んでいる。

「さあて、どうしますか」

そう言うて、要はカツの一枚をつまみ食いする。山田や田中の目には、カツが勝手に浮かび上がって、中空に消えているように見えているのだから、平然としている二人の様子を見れば、この世界ではそれは普通によくあることなのだろう。

続いて小鉢の豆腐をカツの上にひっくり返し、さらにコップの水を掛けて箸で何度も掻き回してみる。カラッと揚がって美味しそうに見えていたカツはあつと言う間に何かの餌かと紛うぐらいになる。しかし驚いたことに山田は小さく「ちっ」と舌打ちしただけで、慌てる様子はない。

一次的認識、二次的認識の理屈で言うなら、料理がぐちゃぐちゃになつたのは、要による作用が加わつた結果であり、それを見る山田の認識はいわゆる一次的認識である、したがって、料理がひとりで踊り出して見栄えを台無しにしてしまふのは自然現象なのである。山田が舌打ちだけで受け止めたのも、にわか雨に遭つて濡れてしまつたのと同じレベルに理解しているのだから。「あーあ、山田さん、今日は何かツキがないんじゃないですか」という田中の反応もそれを裏付ける。

要は、改めてこの世界の異常さに呆れ

るしかなかった。

「まったく……、なんてとこなんだ、ここは」

口を衝いてそんな独り言も出たが、同時に不思議な光景が目に入ってくる。昼時で満員の店内、あたりを見回すと、視界が捉える皿のいくつかで、山田の前に置かれたのと同じように料理がごちゃ混ぜになつている。スパゲッティと野菜サラダを絡め合わせたもの、鯖の味噌煮に香の物と納豆が練りこまれているもの……山田の皿は、要が手を下したのだから理解できるにしても、なぜ他の客の皿が、かくも気持ち悪い混ぜ合わせの状態になつているのか。要が肉体を持っていた世界の常識やマナーにはそのような食べ方は存在しなかつたし、少なくとも他人前で実践すべきものではなかつたはずだ。

やっていることが小学生のイジメだなど、自己嫌悪もおぼえ始めていたところである。だがしかし、手を下した山田の皿だけでなく、よその皿までがカキ乱されて見せられると、一つの疑いが生じてくる。あるいは、もしかして、世界は書き換えられている？、そして、信じたくないことだったが、そのトリガーは要自身の行動？

疑念に対する確証を得たい、さもなければわけのわからない罪悪感に踏みつぶされてしまう、もつと何か、わかりやすく極端な事例が……と思つた時、要はコ

ップになみなみと水を注いで、それを山田の頭の上でひっくり返していた。

当たり前のことだが、山田は即座にびしょ濡れになる。しかし、消えるヒレカツを平然と受け入れた時以上に、この時の山田の態度は驚きだった。怒りもしなければ驚きもしない。水を掛けた張本人の姿が山田には見えていないのだから、怒りを向ける対象は存在していない。そういう意味では、怒らないのは自然である。だが驚きもしないというのなら、いきなり水の塊が落ちてくることをも自然現象と捉えていることになる。

山田は二度三度、首を動かしただけで腰からタオルを引き抜いて頭を拭き始め……腰のタオルつて、いつの間になんなものを装着している？

要は周囲を見まわした。風景の印象は明らかに変わつていた。先ほどまでは無かつたはずなのに、どのテーブルにもタオルセットらしき籠が置かれている。さらに「無かつたはず」を言うのなら、その場にいるすべての人が腰にベルト様ものを巻きつけ、そこにタオルを数枚挟んでいるのだ。メンズとレディースで微妙な違いはありそうだが、男も女もその奇妙なタオルベルトをしている。それは、ひと目で何か奇妙なものが腰に巻かれていると気づくぐらい目立つ代物だ。そんなものを見落としていたはずはない、ということ、山田に水を掛けたその瞬間に、人々がみなそういう装いをする世界

編集後記

新年あけましておめでとうございませす。
今年もよろしくお願ひします。

正月一日には、愛宕山に参拝しお神酒を頂いてきました。山頂付近は雪が残り凍っていましたが、例年のように多くの人が登っておられました。

今年、麻田さん、伊藤さん、鵜飼さんと私の四人で行きました。麻田さんの御好意で雑煮やぜんざいを頂き正月気分を満喫し、下山して居酒屋で新年会をしました。

愛宕山は、難しい山ではありませんが、決して楽な山でもありません。スポーツクラブの高校生などは走っていますが、高齢者にはきつい運動になります。登った達成感があります。

特に、本殿で振舞われるお神酒の神聖は何とも美味しい酒です。居酒屋で飲む酒とは違い寒い中を登ってきて、かじかむ手で素焼きの盃で頂く酒はまさに五臓六腑に染み渡る感じす。

今年、どんな年になるかわかりませんが、我が家では、婆さんの介護と家内の乳がん手術の術後の経過など課題も多くありますが、正月恒例のお伊勢参りを娘と家内と私で参拝してお願いしてきましたので、何とかなると思つていきます。

あれやこれやと心配してもらちがあかないから、適当なところでやっています。

皆様方におかれましても、お身体に十分お気をつけられ、今年一年を楽しく元氣でお暮しされんことを念じてやみません。

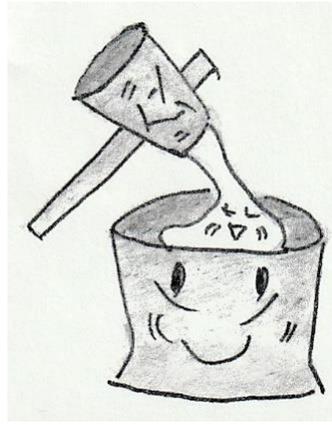
とにかく毎日歩きましょう。歩くのが一番の薬です。

私の格言。「一歩歩けば一秒元氣で生きられる。」早寝早起きを励行しましょう！（嘉）

へと書き換えられたということである。かみ砕いて言うなら、要が山田に水を掛けたことよつて、水の塊が突然落ちてくることが自然現象で起こりうるようになり、それに対処すべく人々はタオルを常時携行するように、世界のあり方が書き換えられた、ということである。

手を下した端から世界が書き換わつていく？、その意味するところの空恐ろしさに耐えかねて、要は店を飛び出してた。

(続)



イツカ、ムコウデ

正月四日夜、NHKBS3で放送された番組『神様の木に会う〜人と巨樹の生命の物語』を見た。

日本列島には、北は北海道から南は沖縄まで、樹齢数百年から二千年を超えるほどの幾種類もの巨樹がある。あると言ったが、生きていると言った方が当たっているかもしれない。番組では、樹齢二千年の最古の桜から、天高く伸び圧倒的な紅葉を見せる大銀杏、各地に点在し人生観を変えるかと思うほどのクスノキの数々、桂の木の美しい森などが、それらの巨樹を訪れまた巨樹に関わり暮らす人たちの思いとともに紹介されていた。三輪明宏氏のナレーションと美しい画面が調和した、見ごたえのある番組だった。さて、日本の巨樹の代表かもしれない、屋久島の縄文杉が詳しく紹介された後、巨樹と日本人にまつわる言葉がいくつか取り上げられた。その中で紹介された「まっすぐに生きるべきだと、思っていた。間違っていた。ひとは曲がった木のように生きる。きみはそのことに気づいていたか？」という言葉がひどく胸を打った。調べて見るとそれは、長田弘

(おさだ ひろし)という詩人が詠んだ、『イツカ、ムコウデ』からの引用であった。

イツカ、ムコウデ

長田 弘

人生は長いと、ずっと思っていた。間違っていた。愕くほど短かった。きみは、そのことに気づいていたか？
なせばなると、ずっと思っていた。間違っていた。なしとげたものなんかない。
きみは、そのことに気づいていたか？
わかってくれるはずと、思っていた。間違っていた。誰も何も分かってくれない。
きみは、そのことに気づいていたか？
ほんとうは、新しい定義が必要だったのだ。
生きること、楽しむこと、そして歳をとることの。
きみは、そのことに気づいていたか？
まっすぐに生きるべきだと、思っていた。
間違っていた。ひとは曲がった木

のように生きる。

きみはそのことに気づいていたか？

サヨナラ、友ヨ、イツカ、向コウ
デ会オウ。

私は、今日ほど、己が身が水中に棲む山椒魚でよかったと思ったことはない。晩酌をしながらこの詩をまた読むとき、私は、私の涙が止まらなくなってしまうことを知っているからだ。

俳句

土田 裕

ご退位の前にとあまた初参賀
さまざまな国の人いて初詣

初春や

余命なんぞは知らでよし

年年に老いを諾ふ初鏡

盆栽の

松にもありし淑気かな

影山 武司

手を開く卍形の像冬日差し
湯の宿の窓に島影石路の花
夫の手の悴みほぐす妻の息
ざくざくと白菜刻む大家族
星を追ふ小さき指や聖夜劇
縊り合わせし悲喜の糸めく年惜しむ
愛鷹の峰の頭はれ初明り
初日の出ぐいと地球を吊り上ぐる
初富士へ雁堤羽ばたけり
初春の光ふはりと招き猫